



典礼委員会担当司祭 菅原友明

今月のポイント

「神の栄光と賛美のため・・・」
これからは堂々と唱えて大丈夫！

パンとぶどう酒が祭壇の上に供えられた後、司祭が「皆さん、このささげものを、全能の神である父が受け入れてくださるように祈りましょう」と招き、会衆が「神の栄光と賛美のため、また全教会とわたしたち自身のために、司祭の手を通しておささげするいけにえをお受けください」という嘆願の祈りで応える、これがラテン語規範版の規定であり、実際に日本の多くの教会でも、かつてはこの応答がなされていたと思います。

ところが日本語現行版の注記には、司祭の招きの後、「一同は司祭とともにしばらく沈黙のうちに祈る」と書かれていて、上記の嘆願の祈りは「することもできる」という扱いでした。さらに、日本への適応として、ミサにおける沈黙が意識的に大切にされるようになってきたという背景もあり、多くの教会で嘆願の祈りは唱えられなくなり、沈黙するのが主流となりました。このため、つい昔の癖で、あるいは、自分の教会でいつも唱えている信徒が他の教会のミサに出た場合など、「神の栄光と賛美のため：」と思わず言い出してしまい、慌てて口をつぐむというような光景がしばしば見受けられます。また、司祭の招きに対して嘆願の祈りで応じたほうが自然の流れなのに、それが唱えられないという欲求不満もあったかもしれません。

このような事態に終止符を打つべく、今回の改訂では、ラテン語規範版通りに、必ず嘆願の祈りを唱えるように改められました。ですから、今後は、罪人である私達がささげるいけにえを神が受け入れてくださるようにと願う、この切なる祈りの言葉を、どうぞ心おきなくお唱えください。ただし、祈りの言葉は次の

ように変更されます。
司祭「皆さん、ともにささげるこのいけにえを、全能の父である神が受け入れてくださるよう祈りましょう」
会衆「神の栄光と賛美のため、またわたしたちと全教会のために、あなたの手を通しておささげするいけにえを、神が受け入れてくださいますように」

なお、もちろん、沈黙を大切にするという日本への適応が撤回されたわけではありません。右記の祈りを唱えたら、「一同はその後、しばらく沈黙のうちに祈る」と明記されています。私達のためにいけにえとなってささげられていくキリストへの深い感謝がこめられた聖なる沈黙となるでしょう。この沈黙に続き、司祭は手を広げて奉納祈願を唱えるのです。

